



銅メダルを手に観衆の声援にこたえる円谷幸吉選手

須賀川の人物史

⑪

東京オリンピック
マラソン三位

つむら や こう きち
円谷幸吉 (一九〇〇—一九六八)

全国民が
くぎ付けに

昭和三十九年十月二十一日
の午後三時十五分、日本国中
の人々がテレビとラジオの前

にくぎ付けとなった。東京オ
リンピック、メインスタジア
ムの国立競技場では、皇太子
御一家をはじめ一般観衆七万
人が総立ちになり競技場ゲ
ートに目を走らせていた。
これは、東京オリンピック、
マラソン競争で一位のアベベ
選手(エチオピア)に次いで
飛び込んできたゼッケン77の
日本選手、円谷幸吉に向けら
れた目であった。その円谷の
背後にびったりとついて、ヒ
ートリ選手(イギリス)が競
技場に入り、今日に語り継が
れている二位、三位争いの劇

的なデットヒートが繰り広
げられ、観衆の興奮と大歓声
のなか、ゴール四百メートル前
で、ヒートリのものですごい追い込
みに円谷の力走もついに及ば
ず三位となった。が、自己記
録を二分短縮した堂々の銅メ
ダルを胸に日本陸上選手では
唯一人、円谷幸吉がメインス
タジアム国旗掲揚塔に高々と
日の丸を掲げたのである。表
彰台に一位のアベベ、二位の
ヒートリと共に上がり、日本
国中の人々から惜しめない拍
手と声援をうけた。



毎年、松明あがしの翌日行われている「円谷幸吉メモリアルマラソン」



東京オリンピックのメインスタジアム、国立競技場に2位で飛び込んできた円谷選手(左)。後方のヒートリとデットヒートを繰り広げるが、追い抜かれてしまう

サトウハチローが 賞賛の詩

また、マラソンに先立ち十月十四日行われた、陸上一万

円谷は世界の詩を贈った。その一節にと

ローマでの陸上競技では入賞者ひとりもなしの日本なのだ
たのもぞ円谷!! たのもぞ円谷
ボクの呼吸は
円谷のストライドと同じはず
み方になる
九千二百 九千六百
さあ最後だ
ガムデーが出た
クラークが歯をくいしばる
ミルズが外側から 二人をぶつこぬいた
ボクは立ち上った
円谷を見た 又見た
イワノフの赤いシャツにつづく
円谷の姿 入賞だ円谷!!
ありがとう円谷
ボクは涙といっしよに頭を深くたれた

ある。
ちなみに東京オリンピック陸上日本選手入賞者は、男子一万六千六百とマラソン二位の円谷幸吉、女子八十歳障害五位の依田郁子の二人だけである。このとき円谷幸吉、二十四歳、アベベ、三十二歳、ヒートリ、三十歳であった。

素直でおとなしい少年

幸吉は、昭和十五年五月十三日、須賀川町字矢部関二十一番地(現大町)、農業、円谷幸七の六男として生まれた。幸吉は、兄五人、姉一人、両親との家族構成の中で、末っ子だったことから、みんなにかわいがられて育ち、素直

でおとなしい少年であったという。
しかし、彼には少年のころからスポーツマンとしての素養がはぐくまれていた。県立須賀川高等学校に進学して、剣道部に入部したが、二年生のとき、バレーボール部に移り活躍していた。この年の夏、マラソンランナーとしてのきっかけが訪れたのである。

次ページへつづく



表彰台に立つ左から2位のヒートリ、1位のアベベ、そして3位の円谷選手。このときの記録は、1位アベベ2時間12分11秒2で、2位ヒートリ2時間16分19秒2、3位円谷2時間16分22秒8だった



円谷幸吉記念館を訪れた円谷選手のコーチだった島野洋夫さんら当時の仲間たち

高校時代 から活躍

それは、福島県縦断駅伝のランナーが急病で出場できなくなり、そのランナーの代走を頼まれて走り、くしくも区間新記録を出した。その後、

須高・細谷光体操教諭の指導のもとにトレイルニングに励み、三年生の秋、東北縦断駅伝(青東駅伝)福島県選手団の一人に選ばれて、めざましい活躍をし、長距離ランナーとして第一歩を踏み出したのであった。この時期、身長百六十三・五センチ、体重五十三キログラムであった。

いまだ破れず15人抜き 青・東駅伝の語り草

三十四年三月、須高を卒業した幸吉は、陸上自衛隊郡山

駐屯部隊に入隊。三十六年の青・東駅伝では三区間走り、三区間とも新記録を出し、延べ十五人を追い抜いた。この記録は、大会始まって以来のことで今日まで破られていない。

記録を 塗り替える

三十七年四月、自衛隊体育学校開校、第一期生として入学。同時に、中央大学経済学部に入学(四十二年三月卒)、スポーツと勉学に精進した努

力家であった。体育学校では島野洋夫コーチのもとに練習を重ね、三十八年八月、ニュージーランド記録会、二万九千五百九十九秒(五十九分五十一秒四)で世界新記録。一時間競争(二万八千九百九十九秒)で世界新記録。三十九年六月の国民体育大会、五千円で日本新記録。八月のオリンピック候補選手記録会、一万円で世界最高記録、併せて日本新記録を出した。

本命のマラソンは四月、毎日マラソンと同時に進められたオリンピック東京大会代表選手選考会で、一位の君原選手に次いで、二位になりマラソン代表選手に決定した。この成果が冒頭の光景となって現れたのであった。

マラソンレース直後、報道陣の「今一番したいことは何か」の質問に対して、幸吉は「緊張の連続でしたから、今は、ゆっくり眠りたい」と答えたという。このとき、レース前、五十六キロあった彼の体重が、レース後五十二・五キロと、三・五キロ減っており、マラソンがいかに過酷なスポーツであるかをうかがうことができる。

しかし、彼を待っていたものは、多くの表彰式とあいさつ回り、国際試合への出場、各種団体、企業の講演会など

のハードスケジュールに見舞われ、ゆっくり休む間もなかった。

もう走れませんか

四十一年は、久留米市で幹部候補生教育を受け、口課にしていたマラソンの練習も思うようにいかなかった。教育修了後、体育学校に戻って練習中、右足首に激痛を覚えたが、痛みをおさえ、四十二年三月、青梅三十キロに出場したが、惜敗、二位となった。その後、持病の腰痛に加え、

六月左足、七月に右足のアキレス腱を切断し、第三品川病院、河野稔院長執刀のもとに、アキレス腱と椎間板ヘルニアの手術を受けて、次のオリピック、メキシコに懸けて頑張ったのであった。しかし、暮れから正月四日まで、須賀川で過ごした幸吉は「父上様、母上様、三日とろろ美味しうございました。(中略)幸吉は、もう疲れ切って走れません。何卒お許し下さい。(以下略)」と両親、兄弟、甥、姪など家族あてと、上官にあてた、二通の血染めの遺書を残し、四十三年一月八日午前一時、埼玉県朝霞市陸上自衛隊朝霞駐屯地の宿舎で頸動脈を切り、自らの命を断った。二十七歳であった。



上北町の田村さんの庭にある「時雨塚」

栗津より松風とどくしぐれ
晋流 戦
藤井晋流は、寛保元年（一七四一）、北町密蔵院観音堂境内（現上北町）に、冒頭の俳句と、松尾芭蕉、宝井其角の名を碑に刻み、芭蕉の「時雨忌」にあたる十月十二日に

時雨塚を建立して、芭蕉の五
十回忌と晋流の師、其角の供
養を営んだ。

この時、晋流は岩瀬山（現
愛宕山）と琵琶の首（池）を
中心に近江八景になぞらえた
八景を選定して公園的整備を
行ったのが今に伝えられてい

晋流は、延宝八年、上州（群
馬県）小泉村、近藤外記の子
として生まれた。本名を佐膳、

通称、太仲、源右衛門、俳号
を晋流、筈月洞、百柳軒とい
った。少年時代の行動を明ら
かにする資料などはないが、
彼が江戸の俳人、其角の門人

須賀川の人物史

⑫

時雨塚の建立者

藤井晋流（一六八〇～一七六二）

須賀川八景である。

現在、この地一帯約三十畝
は、須賀川市が昭和三十四年、
翠ヶ丘公園として都市計画
決定を受け、自然を生かした
公園として整備を進めており、
約八〇％が造成されている。

須賀川八景である。

として、かなりの地位にいた
ことから察すれば、子供のこ
ろから江戸に出て問屋筋に勤
めており、それが縁で須賀川
の豪商、藤井総右衛門（俳号・
川柳）の長女、久須（俳号・
霜楠）の婿として迎えられた

と思われる。

藤井家は、甲州武田家の家
臣であったが、主家没落後、
各地に移り住んでいた。その
後、永住の地として須賀川を
定めて町年寄役などを務めて
いた。元禄十三年（一七〇〇）
春、公儀御代官、岡田五右衛門

から、奥州御買米御用を命じ
られて、大型廻船二十一艘を
持ち、江戸と大阪の各所に屋
敷を構える大商人に成長した。
また、元禄十年（一六九七）
諏訪町千用寺に須賀川の「時
の鐘」として設置した梵鐘に
も藤井家の名を見ることがで
きる。

このような藤井家に迎えら
れた晋流は分家として居を構
え高いに励んでいたが、彼が
三十六歳のとき、妻、久須
に先立たれてからは、俳諧の
道に没頭して各地の俳人と交

流し「筈月集」四冊、「蕉門
録」二冊などを脱稿したが、
上梓することなく写本のみ残
された。もしこれらが出版さ
れていたなら晋流も俳諧史上
に大きな足跡を残していたこ
とであろう。

晋流は常に芭蕉の精神に傾
倒しており、相楽等躬も須賀
川俳諧の後継者として彼を選
び、等躬所蔵の芭蕉真筆十六
点、曾良、等躬の軸各一点を
譲与したが、晋流没後の明和
年間の火災にあい焼失したと
いう。

晋流は、宝暦十一年（一七
六一）十一月二十五日、江戸
の屋敷において永眠、浅草権
寺に葬られたが、遺髪を十念
寺に埋葬して、藤井源右衛門
夫妻の墓碑が建てられた。八
十二歳であった。
(永山祐三)

須賀川の人物史

13

日本銅版画の先駆者

亜欧堂 田善 (一七四八—一八三三)

AODOO
DENZEN
NO
ISCHIBOEMI
SOEKAGAWA
GAJOEKAI

この、アルファベットは、オランダ語での表記で「亜欧堂田善の碑、須賀川雅友会」

と読み、大正十年十二月、須賀川雅友会(会長・佐藤亀之助)が田善の菩提寺である北町、長祿寺参道に建てた記念碑であるが、現在は山門わきに移築されている。

亜欧堂田善は、江戸幕府の老中であつた白河城主・松平定信の命を受けて、わが国最初の銅版画による大画面の「新

訂万国全図」を幕府天文方と共同制作した銅版画の先駆者である。

諏訪町に 生まれる

田善は、寛延元年(一七四八)、諏訪町農機具商・永田惣四郎の次男として生まれ、名を善吉といつた。

彼は、八歳のときに、父と死別した。兄丈吉(画号崑山・狩野派)が家業を継いだ。染物業に転職した。善吉も手伝いの傍ら、兄から絵の手ほどきを受け、絵の上手な子供として評判であつた。これを裏付ける資料として、数年前十歳歳のときに描いた大絵馬が上小山田の古寺山観音堂から発見された。絵馬の裏面に「絵師 須賀川 永田善吉」とある。

須賀川 永田善吉の肖像



県重要文化財「亜欧堂田善像」 遠藤田一筆

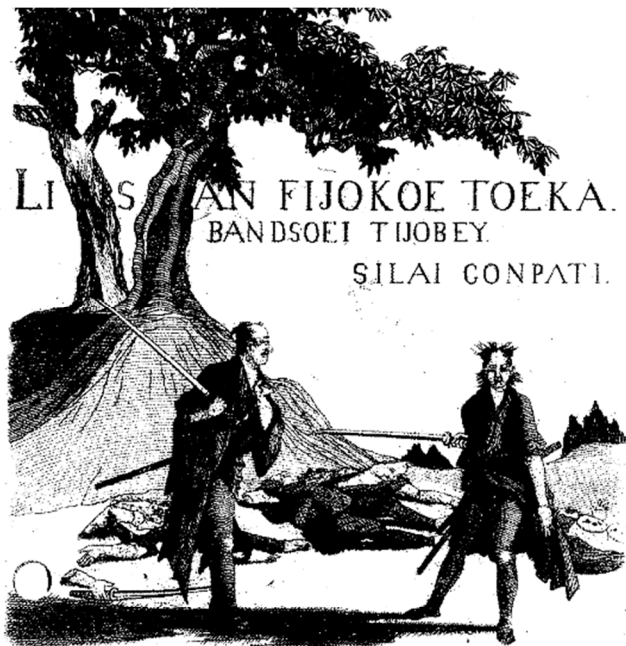
り、画号はないが、すでに画家として活躍していたことが分かる貴重な作品である。

松平定信 との出会い

その後、伊勢国(三重県)寂照寺に画僧月窓を訪ね教えを受け、画技を研鑽した田善は、本町の庄屋・安藤辰三郎の依頼で「江戸芝愛宕山図」屏風を描いた。寛政六年(一

七九四)、領内巡視のため安藤家に立寄り休憩した白河城主・松平定信が、その屏風を目にとめ、さっそく田善を引見し、その才能を惜しみ、専門画家として励むよう、同行した谷文晁に紹介した。

もし、このとき定信に見い出されなかったならば、田善は蘭学や銅版画などとかかわることなく、一介の町絵師として生涯を送つたであろう。それも、その人の運命である。



桶隨院長兵衛と白井権八の決闘の場「驛山比賣塚の図」



「新訂万国全図」(日本近海)部分、106×186cm

アジアと ヨーロッパを一見

寛政八年(一七九六)、白河藩御用絵師となった彼は、屋敷を白河会津町に与えられて、名を太仲と改めた。四十九歳のときであった。

寛政十年(一七九八)、白河藩江戸屋敷に呼び出された田善は、定信からオランダ製の銅版世界地図やヨハン・エリアス・リーディングの「諸国馬画集」風景画、人物画などの銅版画を見せられて銅版画

技法の習得を命じられた。それは、亜細亜と欧羅巴を一見できる、日本版世界地図を幕府天文方と制作することであった。このときに、田善は定信から「亜欧堂」の号を賜ったという。

司馬江漢から破門

まず田善は、技法習得のため、日本における融蝕銅版画の創製者である司馬江漢の門をたたき師弟の縁を結んだのであったが、性格が合わず破門されたといわれている(儒学者・久保木竹窓文書)。結局、田善は、松平定信とその周辺の蘭学者・森島中良、石井恒右衛門らから知識を得、シヨームルの百科辞書などを参考にしながら、彼なりに研究を重ねて技法を習得したといわれている。定信懸案の世界地図が完成するのは十二年後の文化七年(一八一〇)である。その十二年間、彼は、ひたすら銅版画の研究に明け暮れていたことである。その傍ら江戸の街をよく歩いている。それは、

田善の「目」でしか見ることができなかつた江戸の街の風景と風俗を克明にスケッチしたのが銅版画や油彩画の作品として知られている「江戸シリーズ」約五十図が全国の博物館、美術館、個人に所蔵されている。江戸シリーズの銅版画のほか、オランダ製の銅版画などを田善なりに模写した銅版画約二十点がある。文化五年(一八〇八)、日本

田善の「目」でしか見ることができなかつた江戸の街の風景と風俗を克明にスケッチしたのが銅版画や油彩画の作品として知られている「江戸シリーズ」約五十図が全国の博物館、美術館、個人に所蔵されている。江戸シリーズの銅版画のほか、オランダ製の銅版画などを田善なりに模写した銅版画約二十点がある。文化五年(一八〇八)、日本

日本最初の世界大地図 「新訂万国全図」

文化七年、田善は、松平定信の長年の懸案であった日本最初の銅版画による世界大地図「新訂万国全図(一〇六×一八六センチ)」を完成させ、定信の期待にこたえたのである。これは、一七・二×五四・四センチの特大銅板縦横四枚ずつ、十六枚の原版を作成し、それを合わせたものであった。

スタッフは、チーフ・リーダーが幕府天文方の高橋景保二十五歳で、間重富が五十四

最初の銅版画五十二図からなる精密な解剖「医範提綱内象銅版画」が蘭学界の第一人者で医師・宇田川玄真の依頼で完成させ、西洋医学の神髄を日本人に説いた最高の医学書として蘭学者や医学者を驚かせたのである。これらの銅版画は「新訂万国全図」を制作するためのたたき台としてできたといっても過言ではないだろう。

文化七年、田善は、松平定信の長年の懸案であった日本最初の銅版画による世界大地図「新訂万国全図(一〇六×一八六センチ)」を完成させ、定信の期待にこたえたのである。これは、一七・二×五四・四センチの特大銅板縦横四枚ずつ、十六枚の原版を作成し、それを合わせたものであった。

しかし、この地図の長文の凡例の中には田善の名は記されていない。これは、町人の田善がいかに定信の信頼を得た銅版画家として、超大作を残したにもかかわらず、職人として、甘んじなければならぬ封建制下における身分の厳しさを知ることができる。文化九年(一八一二)、定信は家督を嫡子の定永に譲り、樂

翁と号して、築地浴園園に移り隠居した。田善もこの機会に須賀川に帰ったといわれている。

青蔭集の挿絵も制作

須賀川に帰ってからの田善は、石井雨考の依頼で俳書「青蔭集」の挿絵として「大隈滝芭蕉翁碑之図」を銅版画で制作している。このほか、「時雨塚碑景之図」もあるが須賀川に関する銅版画は、ほかに見ることがはない。が、田善は江戸で制作した原版をもとに、八木屋半助の店で「大日本草創亜欧堂先生鐫当所名産鏤盤摺」の看板を掲げ、奥州道往来の旅人に「須賀川みやげ」として布や紙に摺り、工芸品として販売していた。

帰郷後の田善は、商家などの依頼による日本画を主として描き、文政五年(一八一二)五月七日、七十五歳の生涯を閉じるまで一介の町絵師として絵筆を手にかけていたのである。(永山祐三)

昭和五十一年二月、須賀川市に「亜欧堂田善の銅版画」など百二十五点が、市内諏訪

町の医師太田宏一さんから贈られた。

このコレクションは、太田

さんの祖父太田貞喜翁が一生をかけて蒐集した亜欧堂田善の作品などである。

須賀川の人物史

⑭

亜欧堂田善コレクションを蒐集

おお 太田 貞喜 (一八七二〜一九四五)

貞喜は、明治四年一月二日、安積郡三柏村守屋、農業太田

昌貞の二男として生まれた。

十六歳のとき志を立てて上京、開業医のもとで研さんを積

み、須賀川の旧家藤井家の娘テツと結婚した。

その後、明治二十六年、諏

訪町に居を構え、「太田眼科医

院」の看板を掲げた。当時の

医学は、漢方と西洋医学の過

渡期にあつて、人々の公衆衛

生思想も低く、その向上のた

めに医師会の中に特別講話班

を組織し普及につとめた。ま

た、長年にわたり第一小学校

の校医を勤め、学童たちから

は「太田先生」と卒業後も親

しまれていた。

ちなみに、明治二十三年か

ら三十九年までの市内の開業

医は、岩瀬郡立病院（医師四

人）、薄井信太郎、田代広治、

太田貞喜だけであった。

ここで「太田貞喜と田善の

その後」について述べてみた

い。田善については、本紙一

月号に掲載したが、明治期に

入ると田善の研究も盛んにな

り美術研究家が須賀川を訪れるようになった。藤岡作

太郎、沢村専太郎が美術誌

「国萃」に、それぞれ田善

の作品について発表して、

全国の美術品コレクターな

どから注目されるようになった。特に、南蛮美術品蒐

集家として有名な神戸の池

長孟などは数回にわたり須

賀川に来て田善とその一門

の作品を購入している。

これら作品の流出を心配

した佐藤亀之助、太田貞喜、

矢部楢郎、竹内憲治（現九

十八歳）などが中心となっ

て市外への散逸を防ぎ、田

善の顕彰をしようと「須賀

川雅友会」を結成した。

この中で、貞喜も蒐集に情

熱を燃やし質・量ともに屈

指のコレクションとなった。

翁は、昭和二十年二月九

日、田善の作品を掛けた自室

で永眠したという。七十四

歳であった。

福島県では、昭和六十一年、

「太田貞喜の亜欧堂田善コレク

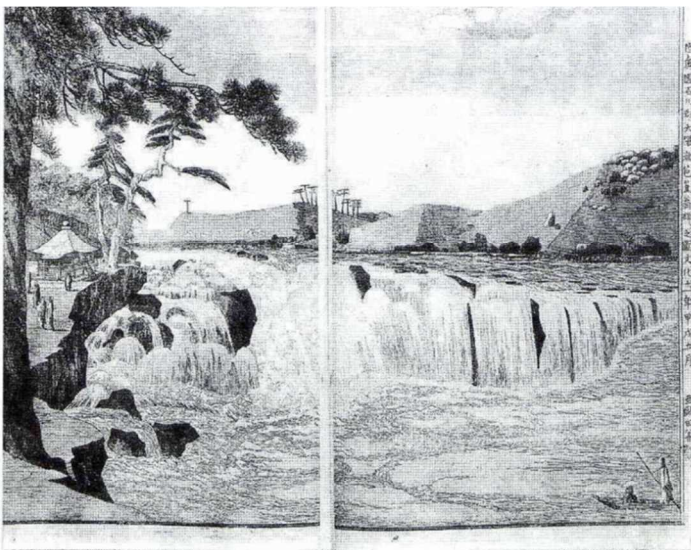
ション」を重要文化財に指定。作品は市立博

物館に収蔵展示されている。

(永山祐三)



太田貞喜翁



亜欧堂田善作「大隅瀧(乙字ヶ滝)芭蕉翁之図」



首藤保之助氏



首藤保之助著の「泥面の研究」

多くを須賀川市に寄贈した首藤保之助と、主なコレクションについて述べてみたい。

保之助は、明治二十年三月二十五日、岩瀬郡木之崎村字北作三十三番地（現長沼町）味戸保左衛門の三男として生まれた。二十六年三月、須賀川尋常高等小学校高等科卒業後、東京青山師範学校に学び、四十二年卒業、浅草永住町に住み、済美尋常小学校に奉職した。このころから教え子を連れて、区内や千葉県などに

大正十二年九月一日の大震災

須賀川の人物史

15

考古資料の蒐集に奔走した

首藤保之助（一八七七一—一九六六）

遺物採集に出掛けたという。特に、この時期の蒐集では、江戸時代の子供の遊び道具であった「泥面」（土で作る素焼にしたメンコ）のコレクションである。この泥面は当時、道路や下水道の工事に伴って、江戸時代の遺構が掘り返されて出てきたものを人夫や知人、生徒などの協力によって、千数百個を収蔵した。しかし、成田の石切場から出土した旧石器を入手している。これは、後に学会から成田型旧石器と呼ばれるようになった。

二十一年十一月、帰郷した彼は泉村（現玉川村）の屋敷内に、二棟の展示場を建て「阿武隈考古館」として一般に公開した。その後、三十二年に須賀川市へ寄贈した。その功績によって県文化功労賞を受賞。四十三年四月二十六日、一生を蒐集にかけて八十一歳の生涯を閉じた。（永山祐三）

昭和二十五年一月二十六日の法隆寺金堂の火災で、国はその年の五月、文化財保護法を制定した。この法律制定以前は、国宝保存法だけで、埋蔵文化財については、何ら保護政策もなく遺跡が農業用地、宅地、工場用地などの大規模開発によって消滅してもまったくの野放し状態であった。この時期、これらの土地から出土した遺物に私財を投じ、克明に記録。五万余点の蒐集をして、考古学上貴重な資料と認められた。晩年その資料の

南は山口県まで遺物の蒐集に奔走した。

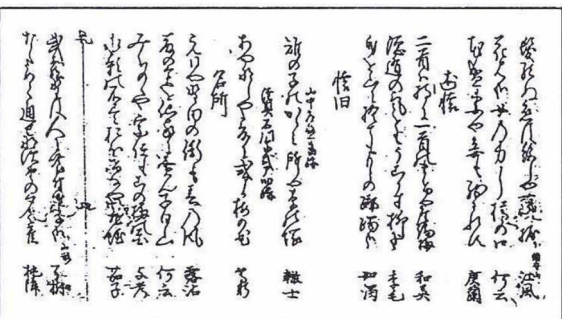
現在、これらの遺物は市立博物館に収蔵されているが、失われた遺跡のものとしては、山形県津谷の旧石器、千葉県市川市真間、須和田の土師器などは貴重な資料となっている。特に真間出土の「朱墨面円硯」は古代の文房具として重要美術品に認定された。

日本の歴史上に旧石器時代の存在を提起した群馬県の相沢忠洋は、昭和二十四年春、岩宿遺跡から発見したポイント（槍先）を、明治大学の芹沢長介教授のもとに持ち込んだが、保之助は、これより二年前の二十二年三月に鏡石町



成田の石切場から出土した旧石器を入手している。これは、後に学会から成田型旧石器と呼ばれるようになった。

（永山祐三）



「伊達衣」の一部

奥州岩瀬郡之内須賀川
相楽伊左衛門にて
風流の初やおくの田植歌 翁
覆盆子を折て我まうけ草
等躬

曾良
以下略

水せきて昼寝の石やなをすらん
今から三百年前の元禄二年
(一六八九)三月二十日、奥
の細道行脚の旅に、江戸を立
った俳人松尾芭蕉は、門人河
合曾良を供にして、街道筋の

名所や旧跡、歌枕をたずねな
がら、「道の奥」の玄関口白
河の関を越えて、四月二十二
日、須賀川の俳人相楽等躬(伊
左衛門)の家にワラジをぬい
だ。

等躬は、芭蕉に長い旅の労
をねぎらい「白河の関越えは
いかがでしたか」などと話し
ながら芭蕉、等躬、曾良とで
三吟歌仙を巻いた。

発句の「風流の初やおくの田
植歌 芭蕉」は、今も人々に

須賀川の人物史

16

須賀川俳諧の祖

相楽等躬 (一六三七〜一七二五)

親しまれている代表句であ
る。

芭蕉と曾良は、それから
二十八日までの七日間、等
躬の家に滞在して、八幡社
(現市役所)、可伸庵(N T
T)、芹沢の滝(五月雨)、十
念寺、諏訪明神(神炊館神
社)、石河滝(乙字滝)ほ
か市内の社寺などを訪れ、
参詣していることが、曾良の
旅日記に記されている。

等躬は、寛永十四年(一六
三七)、白河藩須賀川代官、
初代 相楽貞次の五男で分
家した貞栄の長男として生

まれた。(注・二代目代官、相
楽定共の甥にあたる)彼は、
幕府道中奉行支配下にあった
問屋職と諸色問屋を職業とし
ていた。また、駅長の職にも
あつて、今日という市長に相
当する役であつたといわれて
いる。

等躬が、俳諧を始めたころ
は、俳諧中興の祖、松永貞徳
の門人石田未得について学ん
だ。芭蕉も同じ貞門の北村季
吟を師としていたので、芭蕉
と等躬は互いに知己の仲であ
つたという。

また、等躬は岩城平城主、

内藤義央(俳号 露沾)とも
俳諧を通して親しい関係にあ
つた。平との行き来に詠んだ
といわれている。
『あの辺は津久羽山哉炭けふり』
等躬自筆の句碑が諏訪町長
松院境内にある。

等躬の篇著書には、「葱摺」
(元禄二年刊)、「伊達衣」(元
禄十二年刊)、「一の木戸集」
(元禄十三年刊)、「蕉翁独
吟五歌仙考」、「蝦夷文段抄」
などがある。特に「伊達衣」
には、奥の細道関係が多く収
録されている。

等躬の俳諧は、貞門から蕉
風となり、門人も百数十人いた
といわれている。
元禄七年十月十二日、芭蕉
が大坂で客死したとき、その
死を悼み句を詠んでいる。
『とても死ぬ身なら難波の
枯野哉』 等躬

彼もまた、正徳五年(一七
一五)十一月十九日、平城内
高月邸において露沾公と談笑
中、斃れたという。七十八歳
であった。遺骸は菩提寺の長
松院に葬むられた。

(永山祐三)



222年前に
摂津国から

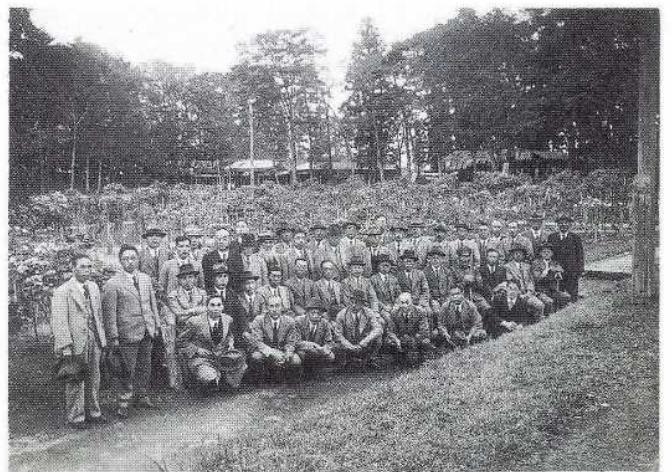
今年も、須賀川観光の一枚看板である国指定文化財、名勝「須賀川の牡丹園」の季節がやってきた。

二百九十種、四千株の花王が、その妍を競い、多くの観光客を魅了させる牡丹園は、今から二百二十二年前の明和三年（一七六六）につくられた。市内の薬種商、伊藤祐倫（本名治兵衛、通称和泉屋忠兵衛）が牡丹の根を薬用にすするため、苗木を摂津国山本村

須賀川の人物史

⑰

牡丹園の祖 伊藤佑倫（一七三五～一七七七）



昭和初期の須賀川牡丹園

源頼朝によって鎌倉幕府が開かれてから、須賀川地方は、二階堂家の所領となった。この地域は二階堂家の一族で、和田峯ヶ城を居城として、阿武隈川沿岸を支配していた須田家の領地であった。

たのが草創と伝えられている。

伊藤家は、二階堂家と同じく、鎌倉幕府から安積郡（郡山市）

御薬園を管理

（現兵庫県宝塚市）から導入して、伊藤家の薬草園で栽培し

祐倫は、享保二十年（一七三五）、道場町（現宮先町）

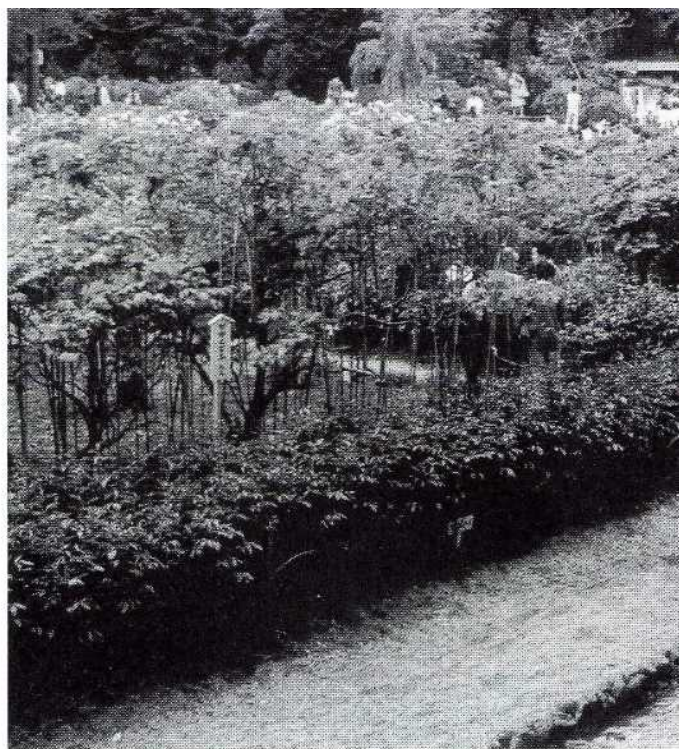
山辺半左衛門の長男として生まれた。が、親戚の薬種商、伊藤八右衛門祐兼に跡継ぎがなかったため、養子となり、その家業を継いだ。祐倫は、薬種商と医者とを兼ねて、地域住人の医療にも

当たりながら、商売に励み、その商圏は、関東・東北一円に及んでいたといわれている。伊藤家の薬草園（現牡丹園）の地は、阿武隈川の西岸に隣接する台地で、古代には東山道が通って交通の要所であったことが、遺跡発掘によって

の支配を任かされた氏族で、大槻に城を構えていた。しかし、天正十七年（一五八九）六月、磐梯山麓摺上原の戦いで、伊達政宗に敗れ、須田家を頼って和田に來たと伝えられている。昭和十年、牡丹園を訪れた文豪吉川英治は、同行した佐藤直四郎（元マメタイムス記者）に、「この地は中世のころ、ここを支配していた領主の御薬園跡ではないのですか」と、園内の地形や環境をみて



須賀川牡丹園



たのではないかと考えられる。

佑倫栽培の ほ場が国名勝に

天正十七年十月二十二日の須賀川城落城によって、須田家は茂木一万石（栃木県）の城主として佐竹家に迎えられた。伊藤家は和田に残り、農民となり、元禄二年（一六八九）、半内祐晴（山辺半兵衛の子）の代に須賀川に出て薬種商となり、屋号を和泉屋とした。このころから薬草の栽培も本格化して、字名も和田千本から伊藤新田となった。

葉園ではなかったか、また、その管理を伊藤家が行っていた。

天正十七年十月二十二日の須賀川城落城によって、須田家は茂木一万石（栃木県）の城主として佐竹家に迎えられた。伊藤家は和田に残り、農民となり、元禄二年（一六八九）、半内祐晴（山辺半兵衛の子）の代に須賀川に出て薬種商となり、屋号を和泉屋とした。このころから薬草の栽培も本格化して、字名も和田千本から伊藤新田となった。

明治の初め、この薬草園を伊藤家から譲り受けた柳沼家（昭和六十三年二月号広報すかがわ参照）では、観賞用の「牡丹園」づくりにかかった。が、祐倫が薬用として栽培した牡丹のほ場をそのまま生かしての整備であった。これが国の名勝に指定された要因となった。

銘文
銘文○正面
比地ミカノ原水木村へ十二町
従是 泉川道
常陸二十八社之内天速玉姫神社
○右 明和八年辛卯四月吉日
○左 奥州岩瀬郡須賀川
泉屋忠兵衛立之
と緑色の斑点のある石材で、高さ八十八センチ、幅三十七センチ、奥行二十七・五センチの角石に刻まれている。
この道標も昭和三十年代の交通機関の発達に伴う道路拡張工事によって、一時は無用の長物として近くの日立製作所厚生寮内に放置されていた。が、昭和三十六年、日立市大久保町の大窪定一、森山町の丹規矩、水木町の河村左内ら泉神社の氏子たちによって、再建された。また、周辺も整備され、「日立市指定有形文化財、泉川道標」として保護されている。

日立に

道標を建立

文を祐倫に戻すが、彼は、屋号「和泉屋」にあやかり、茨城県日立市の「泉が森」（茨城県指定史跡）にある「泉神社」を強く崇敬していた。そしてその証として道標を、日立市大みか町六丁目にある大甕神社前の岩城街道（旧国道六号）と泉川道の追分に建てた。この道標は、参拝者や旅人の用に供された。

祐倫も商用で東奔西走の旅に明け暮れ、安永六年（一七七七）七月三日、会津において没し、諏訪町普応寺に葬むられた。四十二歳であった。
（永山祐三）

治は、

「観る人を見るが牡丹の主かな」の俳句を残している。

二階堂家の御薬園説は、以前から伝えられていたが、この地域は二階堂家よりも、和田に本拠があった須田家の御



日立市の「大甕神社」前にある伊藤祐倫が建立した道標

世の人の見付ぬ 花や軒の栗

今から三百年前の元禄二年（一六八九）、俳人松尾芭蕉と弟子の河合曾良は、奥の細道の旅の途中、須賀川の俳人相楽等躬（広報四月号参照）の家に草鞋をぬぎ、八日間滞在した。この間、等躬や市内の俳人と交遊をもった芭蕉にとって、僧可伸の印象は、

特に深く「おくのほそ道」の中に
「此宿の傍に、大きな栗の木陰をたのみて、世をいとふ僧有。（中略）」
世の人の見付ぬ花や軒の栗」と残している。

芭蕉は、二度可伸庵を訪れ、四月二十四日には同庵で句会を催した。（曾良随行日記）
一、廿四日 主ノ田植（等躬の家の田植）昼過ヨリ可伸庵ニテ会有。会席、そば切。祐碩賞之。雷雨。暮方止。

須賀川の人物史

可伸庵 栗斎（一六〇〇年代）

18



NTT須賀川支店の西側にある軒の栗、可伸庵跡



漂泊のおもいやまず、「おくのほそ道」の旅に出た松尾芭蕉と河合曾良の二人は、元禄二年四月二十二日（陽暦六月九日）須賀川宿に入り、当時の駅長相楽等躬（通称伊左衛門）宅に草鞋を脱いだ。今から約三百年前のことであった……。

この句会の出席者は、芭蕉、曾良、等躬、栗斎、等雲（吉田）須竿（内藤）素蘭（矢内）の七吟歌仙一巻の興行であった。このときの歌仙「軒の栗」の発句を芭蕉は、「かくれかやめた、ぬ花を軒の栗」と詠んだが、後に「世の人の見付ぬ花や軒の栗」と推敲して、「おくのほそ道」の中に入れた。

奥の細道の行脚から三百年の歳月を隔てた今日、俳諧史上に語り継がれている僧可伸の氏素性についての資料などは見当たらないようである。

が、ここで、次の資料などから可伸庵栗斎について考えてみたい。①おくのほそ道 ②曾良随行日記 ③伊達衣 ④白河風土記 ⑤栗木庵記
まず、相楽等躬の家は現在の本町三十三番（NTT）にあった。「おくのほそ道」によると、可伸庵は「此宿の傍に」とある。この地は、旧本山派修験道年行事徳善院の境内地（南北十六間余、東西二十六間余、約四百二十坪）であった。現在は、NTTの一部、本町集会所、市道一五〇二号の敷地となっている。

徳善院は須賀川落城後の慶長五年（一六〇〇）、二階堂家の一族行宋（せうそう）が守屋（現岩瀬村）にあった徳善院の名跡を継ぎ建立した。

相当の素養の あつた俳人？

可伸庵は、この境内に建てられていた隠居所と考えられる。可伸について芭蕉は「世をいとふ僧」「隠栖も心有さまに覚て」と書いているところから、可伸は徳善院の住職を次の代に譲り、隠居の身として、静かに暮らしていたのではないかと考えられる。可伸の、等躬や市内の俳人たちとの付き合い、芭蕉と曾良に対するもてなしかたなどからみると、相当の素養のあつた俳人と思われる。これらのことから可伸は二階堂行栄の子、もしくは徳善院二世を継いだ住職ではなかったか、しかし、このことは想定の上のことであるので、今後確かな資料が現れるのを望み筆を置く。



渡辺光徳作「はせを翁すか川に宿るところ」の図



赤堀信平作「渡辺光徳氏の顔」

須賀川の人物史 ⑬

銅版画家

渡辺光徳（一八七〇—一九四五）

今年の四月、芭蕉「奥の細道」三百年を記念して、須賀川市が建てた「芭蕉記念館」に、枯淡の境地で描かれた、「はせを翁すか川に宿るところ」の図が展示されている。作者は、銅版画家で、近代創作版画運動の担い手の一人として活躍した渡辺光徳である。光徳は、本名を徳一といい、

る。突兀は大正二年春、若くして亡くなった友人であった。この突兀は、光徳が上京するときに酒を酌み交わし、記念の俳句をしたためあったという。このことから、想定すれば、彼の上京は、明治末か大正初めではなかったかと思われる。また上京のことについて、美術雑誌「木星」（大正十四年二月号）「中村彝追悼号」に、光徳は、「白骨を前にして」と題して彝の死を悼んでいる。この中で光徳は、「中村君！（中略）初めて君に会ったのは君の谷中の下宿屋生活時代で、広瀬の下宿であったかと思ふ。ちやうど僕は画家の生活に入るべく郷里を出て来た時であったが、（以下略。注、彝の谷中時代は大正四年七月（五年八月）」と記しており、近代洋画の鬼才、中村彝と光徳との交友を知ることができる貴重な資料である。

光徳は、上京後、小石川区（現文京区）水道端に居住した。銅版画の道に入ったのは垂欧堂田善の作品に惹かれたためであるといわれている。作品にも丸形小判「垂欧堂田善之像」と美術雑誌「みづゑ」

に四か月にわたり論文を連載している。

初期の作品は、二号、三号ぐらゐのものが多く残されている。これらの作品がたたき台となつて、第八回帝展（昭和二年）に「甕焼場」を出品、帝展十一回展までの連続四回入選の作品となつて現れたのである。

しかし、彼は、制作に使用する薬品によつて呼吸器系の病と潜伏性脚気におかされ、起きることができず、布団の中で絵を描くこともあったという。

昭和十八年太平洋戦争が激しさをまし、光徳夫妻は須賀川に疎開したが、自宅は戦火に遭い、作品など一切が焼失した。晩年は、須賀川町図書館（館長矢部保太郎）の留守番を兼ねてその一室を仮り住まいとしながら、絵筆を取っていた。が、再起することができず、昭和二十年九月八日、破乱に富んだ一生を終えた。しかし、それは、自分の選んだ道を歩いた一生でもあった。五十八歳であった。

光徳が図書館に寄付した三点の銅版画は現在、市立博物館に保管されている。

（永山祐三）

青年期に入り二十歳のときから二年間、軍隊生活を送り、除隊後、画家としての志を立てたようである。しかし、彼が上京したのはいつであったのか、初期の作品として、大正二年制作の油彩画「長祿寺本堂再建関係者肖像」と「俳人突兀（高久田金一）像」があ



嘉吉が独身時代に生活していたという指月園

須賀川の人物史

20

うずもれていた洋画家

ひろ
せ
か
きち
広瀬嘉吉(一八八七〜一九五二)

広瀬嘉吉は、生存中そして

没後とも須賀川の歴史の中であまり話題にもなげられなかつた人物で、県史や市史の中には氏名すら載ることもなかつた。

セザンヌの理論を吸収

嘉吉が突然、近代洋画の壇上に現れたきっかけは、今春四月八日から五月七日まで福島県立美術館で行われた「生誕百年記念 中村隼・中原悌二郎と友人たち」の、大正時代を代表する洋画家と彫刻家の作品による企画展で、二年前から茨城県立近代美術館、東京都練馬区立美術館、県立美術館の共同企画で準備が進められていた。県立美術館学芸員の岡部幹彦さんが、収集資料の整理中に嘉吉の存在を見出し、彼の作品について「デ

ツサンに優れ、初期の作品にはセザンヌの理論、造形を十分に吸収した跡が見られる」と高く評価している。

嘉吉は、明治二十年十一月十七日、西五丁目二十七番地(現加治町)仕立職広瀬岩太郎の長男として生まれた。県立安積中学校に進学した彼は、在学中、画家としての志をたて、中退して上京。黒田清輝らが創設した白馬会研究所に学び、三十九年秋に、中村隼を知った。また、同研究所の中原悌二郎、鶴田五郎、高野正哉らと交友を深め、五人組と呼ばれていたといわれ

る。

彫刻家萩原守衛の影響を受ける

四十年、彼は中村、中原らと前後して、太平洋画会研究

所に移り、中村不折、満田国四郎の指導を受けながらミケランジェロやロダンの画集などによって西洋美術の研究をしながら、研鑽に励んだという。四十二年六月には、中村、

中原と共に彫刻家萩原守衛を訪ねた。このとき萩原から受けた影響は、特に大きかったといわれている。この時期、七月号の「人物史」で紹介した渡辺光徳も上京して彼らと同じ太平洋画会研究所に入り学んだのであった。くしくも嘉吉、隼、光徳は同じ年齢で、中原は一歳年下であった。

嘉吉は、大正四年から九年まで須賀川に帰り、指月園(現大町)の一室で絵筆をとっていたと伝えられている。今回の展覧会に出品された「須賀川風景」は、この時に描かれたものといわれている。

この時期、彼は、白河町中町の資産家で多くの芸術家の後援をしていた伊藤隆三郎の援助を受けていたという。

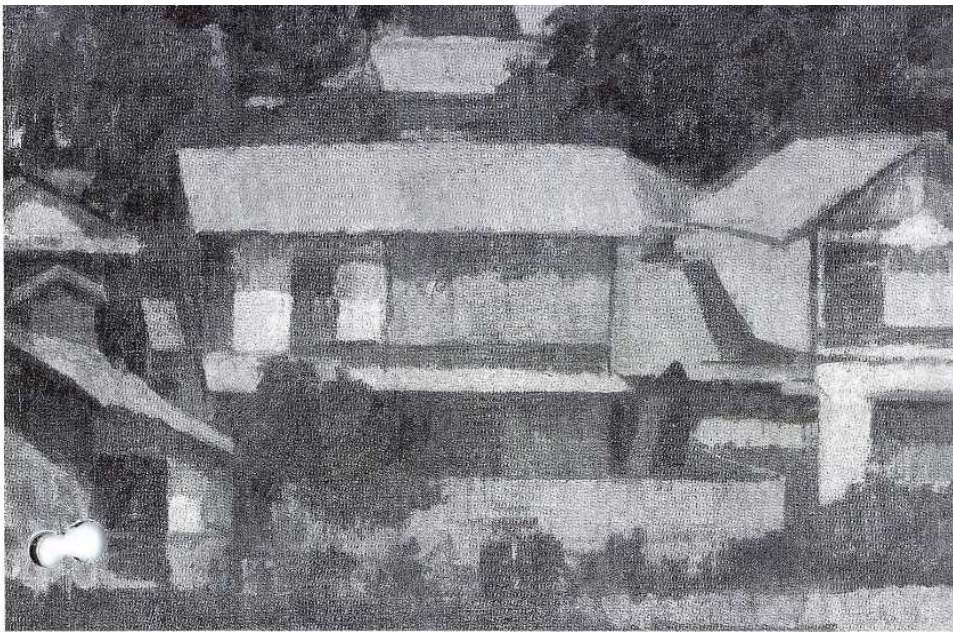
九年、再び上京した嘉吉は、日本美術院の彫刻部に通い、勉強を始めたが、家庭の事情で中断して、十三年三月、宇都宮に居を構えた。隼は、次のような

手紙をあてている。(前略)それはそうと今度宇都宮で展覧会をやるそうだね。内々に、静物が沢山出来てゐるのではないか。かくして置かずにい、のがあつたら是非もつて来て見せてくれないか東京の金塔社の連中はどういふものかこの頃すっかり熱を失つて皆んな沈滞してゐる。どうかいつものを二、三枚もつて来て皆んなの眼をさましてやってくれ。(以下略) 隼

嘉吉兄

と彼の作品を評価していたがその後、中央画壇との交流もあまりなく、その後、戦時下になり、専ら出征兵士などの肖像画を描き、持ち前の技量を公にすることなく、昭和二十六年十二月二日宇都宮市操町一丁目三十三番地の自宅で、六十四歳の生涯を終えた。

現在、嘉吉の油絵の作品で知られているのは十五点くらいといわれている。これは無名画家の作品として片隅に置かれていたためではないかと思われる。今後、これら眠っている作品を一点でも多く見出し、日の目をあててやりたいと思う。(永山祐三)



「須賀川風景」油彩 60.5×72.9cm